



研究論文 (Articles)

大学生は“進学校の呪縛”からどのようにして自らを 解放していくのか

—M-GTA による分析—

葛西優花¹⁾・斎藤清二
(立命館大学総合心理学部)

How university students liberate themselves from the “curse of first-class high-school”? —A qualitative study with M-GTA—

Yuka KASSAI and Seiji SAITO
(College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University)

The purpose of this study is to generate a theory grounded on data about the process by which college students liberate themselves from the curse of the first class high school. The narrative interviews were performed on four research participants who failed their entrance examination of the first choice college and enter the inferior one from their personal viewpoint. The data were analyzed using Modified Grounded Theory Approach (M-GTA). In the process of comparative analysis, the author concluded that it was necessary to change the analyzing theme from “the process of overcoming a sense of failure by unwillingly entered students” to “the liberating process from the curse of the first class high school and moving forward with independence”. “The curse of the first class high school” included the obsessions to the name value of the colleges, to the concept of the insurance college and to the superiority/inferiority feeling to their classmates, although there are subtle differences among participants. They felt the attractiveness of the graduating college, deepened the interaction with other people and reached the understanding about their past, so that they could break themselves from such curse.

本研究の目的は、大学生が進学校の呪縛から解放される過程についての、データに基づいた理論を構築することである。第一志望大学の入試に失敗し、滑り止めの大学に入学した4名の研究参加者を対象に、ナラティブインタビューを実施した。データは修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を用いて分析した。その結果、在籍大学の魅力を感じ、人との交流を深め、自分の過去を理解することで、そのような呪縛から自らを解放していくプロセスが浮かび上がってきた。「進学校の呪縛」には、研究参加者によって微妙な違いはあるものの、大学のネームバリューへの執着、滑り止め大学という概念への執着、同級生への優越感・劣等感が含まれていた。

Key Words : Unwilling entrance, The curse of the preparatory, Modified Grounded Theory Approach
キーワード : 不本意入学, 進学校の呪縛, 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

1) 現所属：大津市役所

第1章. 問題と目的

第1節. 大学生の不応の現在 文部科学省（2019）の調査によると、18歳人口のうち53.7%（約60万人）が大学（学部）に進学している。大学進学が一般的となった現代において、未だに不本意入学は大学生の不応の重要な理由である。寺崎（2010）は、「日本の大学は不本意入学，不本意学生だらけ」とし、現代の日本で最難関大学とされる東京大学であっても学部によっては学生の大多数が不本意入学者であると指摘している。このように、現代でも少なくなない大学生の不本意入学者についての研究は一定数ある。佐藤ら（2015）は、大学への不本意感を抱く学生は受験失敗への思いを再燃させ、理想の大学像とかけ離れた在籍大学に不満が高まっていることを指摘している。彼らへの支援としては、松原ら（2006）が、意識レベルの不登校傾向に影響を及ぼす「大学への不本意感」への介入は難しいため、行動レベルの不登校傾向に影響を及ぼす「不規則な日常生活」への介入を推奨している。しかし、「大学への不本意感」へのアプローチなしでは大学生活を通して不本意感が消えないままとなり、その後のキャリアに大きく影響を及ぼすことが危惧される。

第2節. 不本意入学の様相とその変遷 時代と共に変化した不本意入学の様相を把握することで、不本意感を考えていく。竹内・定金（2020）は、「不本意入学者」についての先行研究を「入学」と「就学」の概念に着目しながら整理した。「不本意入学」は特定の入学大学に対しての不満足、「不本意就学」は、高校卒業後に大学進学したことそのものに対する不満足である。1960年代後半の高等教育の大衆化に伴って、不本意入学者はすでに一定数存在していたが、2000年代後半には不本意入学者に加えて、不本意就学者が増加した。マーチン・トロウ（1976）は、現代を高等教育の「ユニバーサル段階」とし、多くの学生が大学就学を「権利」から万人の「義務」と感じるようになったと言及しているが、日本でも強制されて進学した不本意就学者がかなり存在するとの指摘がある（川嶋，2006）。つまり、この義務感が一つの要因となり、現代で「不本意入学者」が、元々

の「不本意入学者」と増加した「不本意就学者」に枝分かれしていると言える。義務感について、竹内らは「第二志望以下の大学」（滑り止め大学）が、主体的な選択より義務感によって選択した大学だと示唆している。竹内らのいう義務感は「社会」に対するものだが、生徒にとって身近で直接的な人物である親や教師に対するものも含まれるのではないだろうか。例えば、竹内（2016）は進学校出身者が第二志望以下の大学に進学した場合に非進学校出身者と比べてメンタリティの面から不本意入学となるリスクが高いと報告した。また、彼らはより高いレベルの大学に挑戦するなど、心のあり方や親や教師からの多大な影響など環境的にも不本意入学になりやすく、進学校問題と不本意感は密接に関連していると考えてよいだろう。

第3節. 語りへの注目 上記のように、不本意入学者に関する研究は一定数あるが、その当事者視点から不本意感についての経験プロセスを描き出した研究はこれまでほとんどない。鶴田（2016）は、カウンセラーの視点から不本意入学大学生の面接経過を描いた事例研究を報告している。しかし、この研究で検討されているのは、主として精神症状の治療経過であり、挫折経験を振り返って進学校、受験についての詳細な語りは聴取されていない。つまり、不本意入学に至ったプロセスよりも起こった気持ちや症状に注目している。このことは、詳細な症状を把握し、その援助を考える上では大いに役に立つが、プロセスを知り、不本意入学者を作り出さない方法を思案することは難しい。症状といった結果に注目する治療的カウンセリングの性質は、当事者がある出来事を経験していく生々しい過程を取りこぼしている可能性がある。そのため、「当事者」が経験している世界の具体的で個別的な性質を明らかにするためにはその語りに注目する必要がある。

第4節. 挫折からの回復プロセス 傷つきや挫折に焦点を当てる事例研究や不本意入学と大学不応の関連を探る研究など、近年の不本意入学者に関する研究は不本意入学者を「挫折の物語」として捉えているものがほとんどである。その反面、細木（1980）

が、多くの不本意入学者は入学後1年くらいの間に若者特有の回復力・適応力によって不本意だった大学への意味づけが好転すると言及したにもかかわらず、約40年経った今でもその回復プロセスを探る研究はほとんどない。また、筆者自身が焦りや憂うつ感などを引き起こす大学受験（小山，2001）の挫折という大きな出来事を経ても豊かな大学生活を送る学生は少なくないと感じており、そこに傷つきからの立ち直りプロセスが存在すると考えている。よって、対象を挫折から回復した大学生として回復プロセスを探ることは、現在挫折の真っ只中にある不本意入学者への支援を探求することも達成できると考えた。

第5節. 研究の目的 本研究は当初、第一志望の大学への受験失敗を経て、第二志望以下であった大学に入学したことに不本意感を抱いている大学生が挫折感を乗り越える過程で自身の経験をどのように意味付けているかを描き出し、彼らへの支援方策を探求することを目的としてスタートした。しかし、後述のように、データ分析の中で、進学校で形成された一種の価値観が彼らの入学後の経験プロセスに大きな影響を与えていることが見えてきた。ここで、この価値観の変容プロセスを分析してある程度の転用可能性をもつ理論を導き出すことは、「不本意入学者」への理解や支援に役立つ視点の提供が期待できると考えた。そこで、研究目的を「進学校出身者が大学生活を通して進学校の呪縛から自らを解放するプロセスを明らかにしたうえで援助方略を検討すること」と変更した。以下、本研究でいう進学校を「新卒者の50%以上がセンター試験を受験している高等学校」（中畝ら，2003）と定義する。

第2章. 方法

第1節. 研究参加者 第一志望大学の受験に失敗し、現在はx大学y学部 に在籍している当時大学3年生の女性4名が本研究の研究参加者である。そのうちの一人として、第一筆者も含まれている。筆者は、難関国公立大学を目指したが受験に失敗し、滑り止めのx大学に入学した当事者の一人である。第5節

で後述するように、筆者は研究者兼研究参加者となる。他の3名は、縁故法によって募り、事前に口頭あるいはLINEでの説明を行い、研究参加への同意を得た。個人情報の保護のために、4名の研究参加には本名や属性とは無関係なアルファベットが割り振られた。4名の中では、特に親の期待や第一志望大学の決定、内部生への嫌悪に関するパターンでさまざまな経験の相違性が見られた。親の期待パターンとは、親が子どもの難関大学進学を期待していたかどうかである。例えば、Aさんの語りでは父親やその家系にa大出身者が多く、「(父親は)昔からa大行かんの?みたいな。a大はいいよってずっと言われとって」とあり、父親は娘の第一志望大学進学を期待していたと考えられる。その反面、Cさんは親に進路を「自分で決めて」と言われており、進路に親はほぼ期待をしていなかったと考えられる。次に、第一志望大学の決定のパターンとは、第一志望大学決定に関する研究参加者の主体性の有無のことである。例えば、Bさんは尊敬する母親の恩師に勧められた大学だからという主体性のあまり無い理由で第一志望を決定している一方、Cさんは過去に出会った臨床心理士に憧れて心理学を学びたいと思ったという主体性のある理由で第一志望を決定している。そして、内部生への嫌悪のパターンとは、滑り止めの私立大学で出会った内部生へ嫌悪感を抱くかどうかということである。例えば、AさんとDさんは、進学校にいた自分と違って青春を謳歌してきた内部生とx大学という結果が同じことにモヤモヤし、彼らに嫌悪感を抱いていた。その一方、BさんとCさんは内部生への嫌悪感を語っていない。これらを「親の期待・主体性・内部生への嫌悪」でまとめると、Aさんは「あり・あり・あり」型、Bさんは「なし・なし・なし」型、Cさんは「なし・あり・なし」型、Dさんは「あり・あり・あり」型と言えらる。この3つの有無だけでも、受験のプレッシャーや不本意入学による挫折経験の程度、滑り止め大学での生活の苦しさなどは違ってくると考えられる。よって、4名だけでもその多様性を表すには十分であると考えた。

第2節. データ収集方法 語りは、同大学内の個室

においての1対1の半構造化インタビューによって聴取された。その際、許可を得て携帯端末で録音し、逐語録を作成した。インタビューは2018年8月～11月にかけて行い、実施時間は平均44.5分（36分～50分）であった。なお筆者へのインタビューについては、指導教員である第二著者がインタビュアーを担当した。インタビューにおいては、「入学までの経緯」「大学生活」「将来展望」についての開かれた質問を用い、できるだけ自由に語ってもらうことを心がけた。

第3節. 倫理的配慮 インタビューの録音データとその逐語録は厳重に保管され、研究目的以外での使用はしないことを伝えた。また、個人が特定される可能性のある情報や固有名詞などは全てアルファベット表記とした。固有名詞の説明はTable 1に示す。

第4節. 分析方法 本研究は、木下（1999）が開発した修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）で分析を行った。本研究では生の語りデータを文脈から切り離さずに分析し、当事者の経験プロセスを描き出すとともに、同様の経験をする人への理解や支援に資する仮説を生成することが必要であると考へた。そのため、データの切片化を行わず、明確なコーディング技法と「研究する人間」の視点を組み合わせた手順を取るM-GTAを採用した。本

研究では、テーマ変更を行ったため、「進学校出身者でかつ不本意入学者」という範囲の対象者について説明力を有する理論を作成することを目指している。

以下、木下（2003）に従い、M-GTAの分析手順の概略を説明する。まず、筆者は第二著者との検討を重ねつつ、逐語録を繰り返し読みこみ、本研究の分析焦点者を「不本意入学を経験した学生」とし、分析テーマを暫定的に「不本意入学を経験した学生が受験失敗の挫折感を乗り越えていくプロセス」と設定した。分析テーマに関連のある箇所を逐語録から抽出し、それを1つの具体例とし、他の類似具体例を抽出できると考えられる説明概念を生成した。概念を創る際には、概念名、定義、最初の具体例などを記入した分析ワークシートを作成した。データの分析を行う中で、新しい概念を追加していき、1つの概念についてそれぞれ独立したMicrosoft Word形式のファイルとして分析ワークシートを作成した。分析を進めると同時に、説明概念を裏付ける他の具体例をデータから探し、ワークシートの具体例欄に追加記入していった。具体例が少なければ、その概念は成立しないと判断した。生成した概念は、類似例とともに対極例も検討することで、概念の完成度を高めた。その結果や分析の中で気付いたことを「理論的メモ」としてワークシートに記入した。

筆者は、2019年1月～3月にかけて分析ワークシートの作成、データに密着した継続比較分析を行った。

Table 1. 語りに登場する固有名詞

a大学	超難関国公立大学。Aさんの父親の出身大学。
b高校	Aさんが通っていた進学校。
c大学	難関国公立大学。Aさんの第一志望の大学。
d大学	難関国公立大学。
e大学	難関私立大学。Dさんが滑り止めとして受験し、合格。
f高校	Aさんの知り合いの出身高校。偏差値ではb高校よりも低い。
g大学	難関私立大学。Aさんの知り合いが合格。偏差値ではx大学より高い。
h大学	難関私立大学。Cさんの知り合いが通う大学。偏差値ではx大学より高い。
i大学	難関国公立大学。Bさんの第一志望の大学。
j大学	Aさんのアルバイト先の店長が通っていた大学。
x大学 y学部	研究協力者全員が在籍している大学・学部。
(関西私立4大学群)	関西における難関私立4大学をまとめて呼んだ俗称。x大学・e大学・g大学が含まれる。

その中で、2月頃の時点で本研究の分析テーマを絞り込む必要性があることに気づいた。研究参加者は全て進学校出身者であり、大学生一般を代表していないことは明らかであった。分析を続けるうちに、彼らに大きな影響を与える進学校において形成された一種の信念の変容過程が彼らの経験の中核にあるプロセスであることが見えてきた。結果的に、分析テーマを「進学校出身者が進学校の呪縛から自らを解放し、主体的に前進していくプロセス」と設定し直し、より限定された範囲における理論生成を目指す方針を採用した。このような分析途中における分析テーマの範囲の調整は、木下（2003）によって、「方法論的限定」として理論化されている。

新しい分析テーマに沿って、個々の概念から他の概念との関係を検討し、関係のある複数の概念をまとめるカテゴリーを生成し、カテゴリー間の関係も検討し、最終的に全体の関係性が読み取れる結果図を作成した。並行して、生成されたセオリーを簡潔に文章化したストーリーラインを作成した。分析ワークシートの実例の一つを Table 2 に示し、結果図とストーリーラインは、次章の「結果と考察」において示す。

第5節. 研究者自身が研究参加者となることについて 本研究は、筆者自身の語りから得られたデータをも用いていることから、当事者研究の側面を有している。しかしデータ収集は研究者と研究参加者との対話を通じて行われており、研究参加者が共に「研究」をしているという意識を持っているわけではない。したがって本研究は、純粋な当事者研究ではないが、そのような特性を帯びていることは、本研究の持つユニークな側面である。

第3章. 結果と考察

M-GTA による分析の結果、「進学校出身者が進学校の呪縛から自らを解放し、主体的に前進していくプロセス」についてのグラウンデッドセオリー（データに密着した理論）を構成することができた。このプロセスは、6つのカテゴリーと19個の概念から成る。結果図を Figure 1 に示し、ストーリーラインを本章の冒頭に示した上で、以下、木下（2003）の「概念説明型記述」にしたがって説明していく。以下の文中において、大カテゴリーを〈 〉、小カテゴリーを《 》、概念を□、概念の定義は【 】で表示する。研究参加者は A～D と表記し、語りは

Table 2. 分析ワークシートの一例

概念名	5. 合格で生じた緩み
定義	滑り止めとして見ていた大学に合格し、それに対して安心してしまい、第一志望の大学の勉強がおろそかになること。
ヴァリエーション (具体例)	#1 x 大学受けて受かってしまったことによって勉強せんでも大学生になれるってめっちゃ思っと思って。だから多分センター終わってからが割とあんまり頑張られへんかった気がする。やっぱり x 大学を受けて受かったことによってやる気が出なくなっちゃった。から、ちょっと後悔はしてるかなあ…多分私立を受けてなくて何もない状態だったら、もうちょっと国公立頑張れたんちゃうかなって… (A/p7-p8) #2 x 大学決めて…4教科くらいのテストを2, 3回受けて、で、ひとつ受かって。…「何もせんでも大学生になれるな」っていうのがあったんで、ちょっとそこは怠ってたかなあとは思んですけど (B/p10-11) #3 もう滑り止め受かってるからもういいやってなっちゃったのもちょっとある (笑) (D/p4)
理論的 メモ	・滑り止めの大学に合格していなければ、浪人の可能性も考えたかもしれないが、滑り止めの大学に合格したことで浪人の選択肢が薄れることもあったかもしれない、ここも具体例に含めるべきか迷う⇒考察？ ・aさんは、大学生になれる近道として、浪人よりもx大学を選んだ ・選び取った浪人をしない道、との関連 ・研究参加者の中で、志望大学に不合格だった時に納得するかしないか分かれているが、挫折感を乗り越える過程でそれはそこまで関係ないのかも？⇒受け止めこそ必要

10.5point のゴシック体で表した。固有名詞は小文字アルファベットで表した。なお、結果図において、特に影響力の強い概念間の関係は太い矢印、影響力は弱いが潜在的に影響していると推定される関係は点線の矢印で表した。

第1節. ストーリーラインと結果図 進学校出身者は、進学校の「優秀な同級生・実績」や教師たちの言説によって「ネームバリューへのこだわり」を身につけ、現在の在籍大学を「滑り止め」として見るようになる。それらは「進学校の呪縛」として働き、進学校出身者は受験する大学の評価にこだわるようになり、それは大学入学後にも彼らを苦しめる。そして、本命大学の受験が間近になった頃から、進学校出身者は「葛藤を抱きつつリタイアへ揺らぐ」ようになる。進学校出身者は、在籍大学の「合格で生じた緩み」によって、不合格へ繋がる本命受験への迷いを抱く。不合格の後に、進学校出身者は本命大学に未練を残し葛藤しながらも「選び取った浪人をしない道」を進み、在籍大学に入学する。入学した進学校出身者は信じてきた自己価値に直面する。内部進学者に「入学までの過程の違い」を感じ、はっきりした対象でもない「他者の目が気になる」。自分を守るために「高校の同

同級生への見せかけ」を行い、自分が分からなくなって「大学入学後の苦闘」へと走る。しかし、時間とともに「在籍大学の魅力」を感じ、「有名大学に入学した友人の話」を聞いて、新たな価値が自分の中に流れ込んでくる。そして、この二つの価値のせめぎ合いによる「混乱を通じての成長」が起こる。また、このような経験をするうちに自分の「不合格の受け容れ」を行えるようになる。合格で生じた緩みなどによる「努力不足を痛感」し、有名大学にいる友人の話や在籍大学の魅力に触れて「大学への意味づけ」を行う。また、入学後に一瞬で過ぎ去る「慌ただしい日々」に癒されることでいつの間にか過去に折り合いをつけたり、その焦りによって「挫折感に見て見ぬふり」をしたりする。そして、自分の中で絶対的なものだった進学校の呪縛は次第に揺らぎ始める。その後、ついに進学校の呪縛による「学歴至上主義の崩壊」を迎える。それにより過去から「スイッチの切り替え」を行い、視点は未来へと移り、「将来の展望」を意識するようになる。進学校出身者は、進学校の呪縛から解放され、現在・未来の自分に焦点を当てるようになり、「解放・前進」のプロセスを歩む。一方で、プロセスの全段階において「家族の影響」は進学校出身者に強く働き続けている。

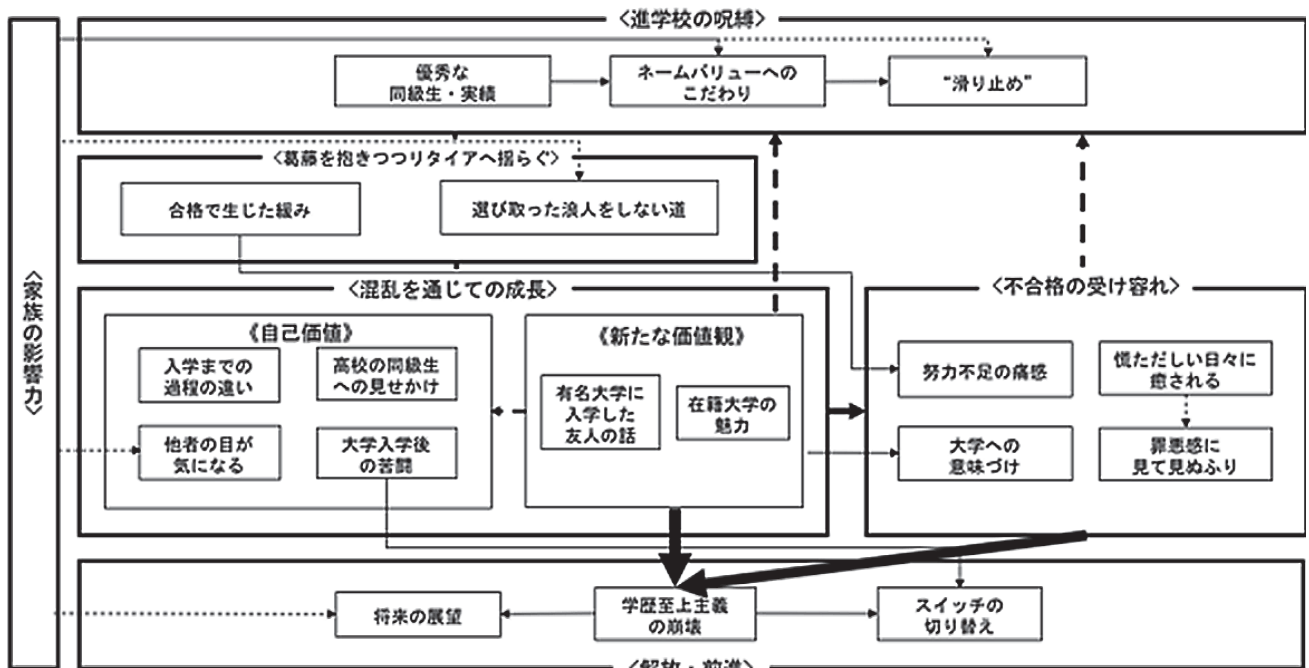


Figure 1. 進学校出身者が進学校の呪縛から自らを解放し、主体的に前進していくプロセス

第2節. カテゴリー・概念の説明

1. <進学校の呪縛> 本カテゴリーは、進学校によって培われた偏った価値観に支配されることを「進学校の呪縛」と命名し、概念化したものである。進学校の呪縛は、進学校在籍時のみならず、大学入学後でも進学校出身者に大きな影響を与えている。

1.1. **優秀な同級生・実績** 進学校出身者が強く影響を受けるのが、進学校での生活を共にする**優秀な同級生・実績**である。この概念は、【進学校で出会った優秀な同級生や進学実績に引け目を感じる事】と定義される。Aさんは、以下のように語っている。

やっぱりb高校入って周りがやっぱりa大・c大・d大を目指す人ばっかで、そこでめっちゃ頑張るとって、どんどんやってるうちになんか選択せなあかん現実が突きつけられるやんか。そこで、a大に行くほど自分は学力がないなっていうのと、あんまり惹かれへんかった、魅力を感じひんかったから、高二くらいでc大にしようって決めた。(A/p2)

Aさんのように、途中で当初の志望大学のレベルを落としたという語りは他にも共通して見られた。また、先輩たちの合格実績も進学校出身者にとっては重圧である。

1.2. **ネームバリューへのこだわり** この概念は、【進学校の雰囲気や強く影響を受け、大学のネームバリューを強く意識すること】と定義される。こだわりの内容と程度は、進学校によって様々である。Dさんは、インタビューにおいて、以下のように語っている。

中高一貫やったんやけど、中学入った時から「あなたたちは国公立に行くんですよ」みたいな感じで育てられてきたし…国公立行くのが当たり前になって、で、もうちょっと下のコースの子らとかは（関西私立4大学群）を目指しようって感じで結構格差が激しくて、やから、それがちょっとプレッシャーになってるところがあったかな。(D/p6-7)

Dさんの語りから分かるように、クラス毎に受験大学のランクまで決められることで偏った価値観はさらに助長され、それは学生にとって大きなプレッシャーになってしまう。

1.3. **滑り止め** 進学校出身者は、受験大学を決定する時に幾つかの大学を**滑り止め**とみなす。「滑り止め」とは、本命の大学に不合格だった場合の保険として受験しておく大学を表す言葉である。滑り止めの大学は、早くに結果が分かり、本命の勉強に集中するための安全装置として働いていた。また、浪人を免れる唯一の道でもあった。そこで、この概念を【第一志望大学のための勉強や、不合格だった時の安全装置として、第一志望大学よりレベルが低いと見ている大学を選定すること】と定義した。以下はその具体例である。

滑り止めが（関西私立4大学群）っていうのもだいたいみんな決まっていたので、まあとりあえず…受けておこうかなって感じ。…国公立を受ける時の練習みたいな。…たまたまx大学とe大学は受かったんで…まあ今はx大学の方が勢いがあるっていうのを塾の先生から聞いたんで、じゃあx大学ってことでx大学にしました。(D/p1)

このように、高校によって滑り止めの大学の定番が決まっている。一方で、些細なきっかけで在籍大学を選び取る進学校出身者もあり、この場合には、大学入学後に在籍大学の魅力を見出すことが難しく、置かれた状況への意味づけの困難に繋がると想像される。

また、その後**合格で生じた緩み**が生じるのは、本命大学の勉強に精を出すための安全装置として働くはずの滑り止め大学の合格がうまく機能していないことを意味している。

2 <葛藤を抱きつつリタイアへ揺らぐ> 本命大学に不合格であった進学校出身者は、浪人して本命大学受験をするか、浪人をせず、滑り止めの大学に入学して本命大学受験からリタイアするかという選択を迫られる。そして、進学出身者は葛藤しつつもリタイアへ気持ちが傾いていく。しかし、この選択は自身の成長につながっていくものでもあった。

2.1. **合格で生じた緩み** この概念は、【滑り止めとして見ていた大学に合格し、その結果に安心してしまい、第一志望の大学の勉強がおろそかになること】と定義される。

合格による緩みは、進学校出身者に後悔として残り、不合格の受け容れを行う際にこれを乗り越える

ことが避けては通れない道となる。以下は、Aさんの語りである。

c大学の勉強やけど、その、x大学受けて受かってしまったことによって勉強せんでも大学生になれるってめっちゃ思っと思って。だから、多分センター終わってからが割とあんまり頑張られへんかった気がする。やっぱりx大学を受けて受かってしまったことによってやる気が出なくなっちゃった。から、ちょっと後悔はしてるかなあって感じ。受けたこと。(A/p7-p8)

この概念は、＜不合格の受け入れ＞の中で、避けては通れない「努力不足の痛感」で、再度振り返られることになる。

2.2. 「選び取った浪人をしない道」 第一志望大学の結果が判明し、進学校出身者は、様々な葛藤・迷いの末、進学校出身者は「選び取った浪人をしない道」を進むことにする。この概念は、【第一志望の大学に不合格だとわかった時、様々な葛藤や迷いの末に浪人をしない道を選び取ること】と定義される。以下の語りはその典型例である。

（大学生の憧れとは何かと聞かれて）なんか大学生の憧れ…やっぱりもう一年浪人して勉強するのが嫌やってん。もう1年間この苦しい受験勉強をするのが嫌やったから大学生になりたかったんやと思う。あとはなんかまあキラキラした？（笑）自分でなんでもできるとこ？なんでもできる大学生になりたかったし…自分のやりたい勉強、メディアに関する勉強を早くしたかった。(A/p11)

3. <混乱を通じての成長> 進学校の呪縛は入学後も進学校出身者を刺激し、混乱状態に向かわせる。進学校出身者は様々な混乱を経験するが、それは自身を成長させる過程でもある。それは、進学校の呪縛を揺るがし、呪縛からの解放へと彼らを導く。本カテゴリーは、《自己価値》と《新たな価値観》の二つの小カテゴリーからなる。

3.1. 《自己価値》 滑り止めの在籍大学に入学することになった進学校出身者は、しばらく呪縛に苦しむ。そして、進学校時代から信じてきた自己価値に改めて直面する。

3.1.1. 「入学までの過程の違い」 進学校出身者は、入学して様々な人と出会う。その中で、進学校出身者

は彼らとの「入学までの過程の違い」を目の当たりにしてやるせない気持ちを抱く。この概念は、【在籍大学で出会った人々と自分を比べて、在籍大学に至る過程が違うのに結果的に彼らと同じである自分に歯がゆさを感じる】と定義される。以下は、いわゆる「内部生」に対して複雑な感情を抱くDさんの語りである。

x大学って結構ネームバリューも持ってるし、世間一般的に見たら「すごいね」って言ってもらえるところやから、まあそれなりに満足はしてたけど、そのエスカレーターで来た子らとちょっと…ソリが合わんなあっていうのがあって。…途中の過程がさ…あの子たちは青春も謳歌してさ、やりたいこともやってきて、で、x大学に来てたと。こっちは国公立行くために勉強に全てを捧げてきて、結果x大学になったらさ、今までやってきたことが全然違うわけやのに、世間から見たらどっちもxの大学生ってなるのがちょっとモヤっとしてたかな。(D/p8-9)

Dさんの場合、受験期後半で自分の高校時代を後悔するような語りも見られた。

3.1.2 「他者の目が気になる」 ネームバリューへのこだわりを持つ進学校出身者は、他者も同じ価値観を持っていると信じ、その他者からの目を恐れるようになる。この概念は、【学歴によって、良くないレッテルが貼られてしまうと思ひ込むこと】と定義される。インタビューでは、以下のような語りが見られた。

高校が割と自分であれやけど賢いところやったから…それもあってb高校行ったのにx大学、どんだけアホやったんやろうみたいな。っていうのが考えられるのが嫌で。そう、やから別に「x大学です」っていうのはまだよかったけど「b高校行ったのにx大学？ああ全然勉強してこんかったんやな」って思われるのが嫌やった。…大学から会った人に「x大学やで」「ああそうなんです」って言われるのはいい。でも高校も知ってる人に「x大学です」っていうのが嫌やった。(A/p14-15)

進学校出身者は、進学校の優秀な同級生・実績を意識して、彼らのようになれなかったと感じ、他者にもそう見られているのだと思ひ込む。「他者」とは、

高校の同級生のこともあれば、具体的な対象のない場合もある。在籍大学を「賢い」と評価してくれる他者に対して違和感を持つこともある。Aさんは、以下のように語っている。

どう思われるかが多分いっちゃん、人のこと、周りからの視線をめっちゃ気にしちゃうから余計？かな。そう、だから「x大学です」って言って「賢いやん」って言われるのも嫌やった。なんか自分で言うのもめっちゃあれやけど、「そのレベルの賢さじゃないねん！」みたいな。(A/p15)

3.1.3 高校の同級生への見せかけ 進学校出身者の中には、高校の同級生よりも自分が充実していると思い込もうとする者もいる。この概念は、【有名大学に進学した同級生の生活と自分の生活を比較し、自分の方が大学生活を充実させていると見せかけ、納得しようとする】と定義される。以下は、Aさんの語りである。

めっちゃ性格悪いけど…高校の時にめっちゃ仲よかった〇〇っていう子がおんねんけど、その子めっちゃ賢くて、a大に行って、私はx大に行ってんけど、その子がもう私生活充実してなさすぎて…その子に「私の方が楽しんでるで」感を出すことによって解決しようとしてた。…あの子めっちゃしんどいって言うねやんか。「まあa大やからええやん！」っていうけど、「あ、この子は大学生活あんま楽しんでないや」「私はめっちゃ楽しんでるけど」て思うことによって、かな。あとは…その子はずっと彼氏できんかったけど、私は二回の夏に彼氏ができた(笑)(A/p18-19)

また、直接でなくてもSNSを通じて自分の充実を確かめたり、高校の同級生にそれをアピールしたりすることもある。

3.1.4 大学入学後の苦闘 第一志望でない大学に入学したことで、進学校出身者は「迷子」状態になる。そして、迷走とも言える行為に走るが、この行為は進学校生活で形成された自己価値への直面に一步近づく行為でもある。この概念は、【大学入学後、単位取得などの面で大学生活をうまく送れないこと】と定義される。

めっちゃ迷走してて、まあ勉強に集中したいっていうのもあってやめたから、ある程度勉強は続

けてて、一定の。で、なんかもう第二段階でなんかa大の病院でボランティアしたり、バイトを1年したり、なんかちょっと前までワインのなんかちょっとビジネスしてて、それを続けたり、みたいな。めっちゃ迷走してた。(笑)(C/p11)

迷走という言葉は、本来ネガティブなことに使われることが多い。しかし、Cさんの選択した行為には明らかに積極的な側面がある。一見方向性の喪失のように見える行動は、未来への「スイッチの切り替え」をもたらす大きなきっかけをもたらすものでもあった。

3.2. 《新たな価値観》 大学入学後、信じてきた自己価値に加えて外から新たな価値観が流れ込んでくる。それは<進学校の呪縛>を揺るがし、「大学への意味づけ」を自分なりにしていくきっかけとなり、<不合格の受け容れ>を加速させる重要な変化にもなる。

3.2.1. 有名大学に入学した友人の話 進学後会った高校時代の友人に聞いた大学生活は、想像していたような充実したものではなかった。進学校出身者はネームバリューへのこだわりを持つ自分への疑問を抱くことになる。この概念は、【有名大学に入学した友人の話聞き、「有名大学に入学=充実した大学生活」の思い込みが壊されたこと】と定義される。Aさんは、以下のように語っている。

でもx大学に来て、多分c大学とか行った子の話聞くとめっちゃしんどそうで。授業いっぱいあるし、難しいし、みたいな。それに比べてx大学って授業少ないし、簡単っちゃ簡単やから学校生活を充実するっていう面では、x大学でほんまによかったなって思う。(A/p16)

有名大学に進学した友人は、その講義内容の難しさや多忙さに苦しんでいた。その姿を見て、進学校出身者は、自分が在籍大学で充実した大学生活を送っていることに気づく。そして、「在籍大学の魅力」を発見する。また、充実した大学生活を交友関係ではなく、勉強と考えていた場合は、友人の楽しそうな様子に衝撃を受けることもある。

3.2.2. 在籍大学の魅力 高校の友人の話聞き、進学校出身者は在籍大学で充実した大学生活を送っている自分に気づく。そして、その他様々な経験をす

ることで「在籍大学の魅力」に気づく。この概念は、【挫折感を持ちながら入学した大学で、様々な経験をし、その大学の魅力を感じる】と定義される。以下は、前者が大学組織の魅力、後者が在籍大学特有の魅力についてのBさんとCさんの語りである。

出会った子も軽音サークル入ろうかなって思ってるって言ってたんで、一緒に行って、で、なんか結構すぐに打ち解けられて、で、なんか男友達もいなかったんで、結構できるようになって、すごいめちゃくちゃ楽しくて…私的にはx大学で、高校の時は劣等感あったんですけど、大学に行ったらみんな一緒やし大阪に行ったら結構バイト先の人とかには、なんか「x大学、賢いね」って言われるんで…（劣等感を）感じなくなっていった。…もういいかなって思って。(B/p22-23)

どっちかっていうと（大学の教授は）教育者っていうより研究者じゃん。だから別に生徒に干渉する事もないし、…だからそっちの方がいい。その距離がいい。…何か、大丈夫？とか聞かないじゃん。先生って。認識してるかしてるかしてないかもわかんない状態やからさ。それが一番やりやすい、私からしたら。…干渉してこない人が好き。先生やったら。(C/p31-32)

4. <不合格の受け容れ> 進学校出身者は、<混乱を通じての成長>を経験しつつ次第に<不合格の受け容れ>を行う。これらは呪縛からの<解放・前進>に繋がっていく。

4.1. 「努力不足の痛感」 進学校出身者は、自分の「努力不足の痛感」をする。滑り止め大学の「合格で生じた緩み」が努力不足につながり、不合格を招いたと理解し、それを率直に認める。この概念は、【第一志望大学に不合格だった原因の一つとして、自分の努力不足を認めること】と定義される。以下は、インタビューにおけるBさんの語りである。

あんまり勉強できなかったなっていうのは後悔していて、i大学ももうちょっと頑張ればいけたなっていうのはすごい思ってます。…x大学の時は結構頑張れたし…i大学落ちたのも自分でも納得の結果だったんで結構すぐ切り替えられた…そこは…後悔はないんですけど (B/p17)

志望大学が不合格だった時、進学校出身者はある

意味納得の感情を得ている。それは、自分の努力不足が不合格を招いた一因であると認めたということでもある。

4.2. 「在籍大学への意味づけ」 以前は、在籍大学を滑り止めとして見ており、入学後もそれについて劣等感を抱いていた進学校出身者であったが、有名大学に入学した友人の話聞き、在籍大学の魅力に気付くことで在籍大学への積極的な意味づけを行うようになる。この概念は、【自分が今の大学に在籍していることに意味を感じる】と定義される。以下は、Cさんの語りである。

空手辞めて、勉強にシフト変えてから、x大学y学部の先生がどれだけすごい人かっていうのをやっぱ知るようになってから、あー自分めっちゃ恵まれてる場所にいるわと思って。…なんか、（気持ちの整理がついたのは）そっからかな。(C/p14)

4.3. 「慌ただしい日々で癒される」 進学校出身者にとって、時間の流れは一番の薬であった。本人も気が付かないうちに慌ただしい日々が負の感情を和らげてくれていたのである。この概念は、【大学入学のための手続きや入学後の大学生活に追われ、いつの間にか過去に折り合いをつけていること】と定義される。以下は、Cさんの語りである。

（志望大学に不合格だった時の気持ちを聞かれて）やっぱなんかそれは落ち込むし…ああなんか色々足りなかったんだなあと思ったけど、んーそんな私もともと前向きじゃなくて。めっちゃネガティブやって。…もうほんとに無理みたいな。もう無理ってずっと思ってたけど、でも、淡々と進んで行くやん、やっぱ。入学手続きとか、引越してとか。結構一瞬でバーって過ぎ去って、で、いざx大学に入学しましたってなったら気持ちが変わった。入学式に、なんかその時まではずっとなんか淡々ととりあえず引越して住まな、みたいな感じ。(C/p12)

4.4. 「挫折感に見て見ぬふり」 進学校出身者は、常にスマートな方法で不合格の受け容れを行えたわけではない。「挫折感に見て見ぬふり」は、少し強引で逃避とも言える行動であった。しかし、不合格の受け容れをするためには耐えきれない挫折感を一度外へ置

いておくという行動も意味のあるものであった。挫折感に見て見ぬふりは慌ただしい日々に癒されることで意味のあるものになっていく。この概念は、【まだ自分の中に残る挫折感に気づきながらも、しょうがないと諦めてそれを自覚しないようにしていること】と定義される。以下はDさんの語りである。

大学自体に、なんかこう嫌や！って感じはせえへんかったけど、その、なんか受験を最後まできっちりやりきれなかったから、全力を出し切れなかったっていうのは自分の中であつたから…もっと頑張った方がよかつたかなとかも思ったし、でも、あれ以上（の頑張り）は当時は無理やつたっていうのは頑張れなかったっていうのはあるから、まあなるようになった形ではあるかなあと思うけど。…納得はまあまあそやな。納得しようとした。(D/p8)

5. <解放・前進> 進学校出身者は<新たな価値観>や<不合格の受け容れ>を通じて、遂に学歴至上主義の崩壊、つまり<進学校の呪縛>からの解放を迎える。さらに、その後進学校出身者は未来への視点を持つようになる。つまり<解放・前進>である。本カテゴリーは、完結ではなく、これからも続いていく発達途上のカテゴリーである。

5.1. 学歴至上主義の崩壊 進学校出身者は、自らに植え付けられた呪縛である学歴至上主義の崩壊を迎える。これは<新たな価値観>に触れ、<不合格の受け容れ>が行われた到達点である。この概念は、【いろいろな経験をし、学歴の良さがその人の賢さ、人柄を決めているわけではないことに気づくこと。そして、自分の行動こそが自分に一番影響を与えていることに気づくこと】と定義される。以下は、Cさんの語りである。

あーやっぱ大学だけじゃないなって。大学って結局一緒に、なんか入って何やるかだなあって思った。…もうちょいちゃんとやってきた子の方が輝いて見えるし、なんかずっとその飲んできました、バイトしてましたみたいな人は、普通に喋っててもおもんないなって。なんか知る気がない、全然。だから、大学だけじゃないなって。(C/p8)

5.2. スイッチの切り替え 進学校の呪縛から解放された進学校出身者は、現在・未来へとスイッチ

の切り替えを行う。この概念は、【過去に関する悩みから目を離し、現在・未来に目を向けていくこと】と定義される。以下は、大学入学後の苦闘から抜出したDさんの語りである。

徐々に学校のこともやっとなって、4年で卒業できへんと思って。で、切羽詰まってやり始めたのが2年のときかな。3年生なって…メンタルクリニック行って話聞いてもらったりとか薬飲んだりして自分のことを理解していくうちにちょっと余裕が出てきて。やっぱ大学生の間に…自分のやりたかったこと勉強せなあかんって思って。し始めてからはまあ普通に授業も楽しくまじめに受けられるようになったから、そこから成績は上がってきたかな。(D/p18)

進学校出身者は、人間の価値は学歴によらないと気づいた後、現在・未来へとスイッチを切り替えることで挫折感を乗り越えて前進していく。これは、いわゆる転換点である。ここで、切り替えは必ずしも主体的なものではない。時には現実問題などが差し迫って現在・未来の土俵へ押し出された形で始まることもある。将来を意識させられる大学生という時期は、特に半強制的な切り替えが起きやすいのではないだろうか。

5.3. 将来の展望 学歴至上主義の崩壊を迎えた進学校出身者は、将来の展望を深めるようになる。スイッチの切り替えで出てきた現在・未来への悩みや葛藤は将来の展望を意識したゆえの産物でもある。この概念は、【将来何をしたいかが明確になっていること】と定義される。具体例には、多様な語りがあったが、ここではCさんの語りを示す。

一回海外に出て心理学勉強したいなあ。…日本ではまず公認心理師（の資格を取る）…とりあえず、いつも帰ってこれる。国籍が日本やから。やから、とっといたら、日本では使えるから。(C/p15-16)

6. <家族の影響力> 本カテゴリーは、家族の影響力という一つの概念から構成されている。この概念は、【進路や身の振り方を決めたり評価したりする時に親やきょうだいの価値観や学歴、言動に影響をうけること】と定義される。家族の影響力は経験プロセスにおいて何度も働き続ける。ネームバ

リユーのこだわりやそこからの滑り止め大学への評価、選び取った浪人をしない道へ進む背景、家族という他者の目が気になる、将来の展望への影響などその影響は多岐に渡る。以下は、インタビューにおけるAさんの語りである。

もともとお父さんがa大の人やって。…昔からa大いかんの？みたいな。a大はいいよ～ってずっと言われとって。…a大ってすごいなあ、行きたいなああって思ってた。(A/p1)

パパの家系が…上がパパのお兄ちゃんがa大でその人の娘さん一人会社で一人がa大の医学部やねん。その下のパパがa大で私が私立っていうのにめっちゃ抵抗があって。…パパもありそうやったけどそれ以上に私があった。…多分そういうのがなかったら私立でええやって思ってたと思うねんけどなんか家系的にそういうのがあったから私立めっちゃ悩んだ (A/p10-11)

この語りからは、家族成員の言葉や経歴が研究参加者の志望大学の選択段階（ネームバリューのこだわりへの矢印）や浪人を考える段階（選び取った浪人をしない道への矢印）に大きな影響を及ぼしていることが分かる。また、以下はDさんの語りである。

（親に）どうやって反抗したらいいんかわからなかった。…親が家から通えるところにしてって言ったからしぶしぶ近畿圏で（志望大学を）選んだって感じなんよね。だから、その時からずっと家から出たいとは思ってたけど…選択肢に無かった。…（関東の）大学院に行くぐらいやったらもうええやろって。…やっぱ高校の時は、まだ自分が未成年やってことがすごいあったから、生きていける気もせんかった… (D/p15-17)

お金のことにしても申し訳ないと思うのやめようって。私がこうなったのは、こいつら、親のせいやから、どこまでも親のすねをかじるって決めて。最悪一人でも今生きていけるのは生きていけるけど、利用できるものは利用しようくらいに思ってるから。(D/p22)

Dさんは、インタビューの中で家族の望みや要求をぐっと堪えて我慢してきた経験を多く語っている。志望大学の選択では、Dさんは親の望み通りに関西の大学を選んでいる。しかし、大学生活を通し

て、Dさんは関東の大学院進学という目標を達成するために親をも利用しようという強い気持ちを持つようになった。これは、全段階でずっと働き続けていた<家族の影響力>が、Dさんを押さえつけるものではなく、Dさんが目標に向かうための原動力に変わってきていると考えられる（<解放・前進>の将来の展望への矢印）。

このように、<家族の影響力>は時にその形を変えながら全段階に強く働き続ける。

第4章 総合考察

本章では、結果を踏まえて、進学校の呪縛、呪縛と関連する大学選抜方法、進学校出身者への援助方略の試案といった観点から「進学校出身者が進学校の呪縛から自らを解放するプロセス」についての総合考察を行い、そのうえで、今後の課題と展望を述べる。

第1節. 進学校の呪縛 分析の結果、「進学校の呪縛」という概念が浮かび上がった。その代表的な内容としては、「進学校の合格実績に乘らなければならない」「ネームバリューのある大学でなければならない」「周りの同級生はみんな賢い」などがあるが、学校によっては「国公立大学でなければ価値がない」「推薦入試での合格には価値がない」などの価値観もあり、進学校の呪縛も多種多様であることが示唆された。このような価値観は研究参加者が大学に入学した後も働き続け、この価値判断によって自らを「落ちこぼれ」だと思わせる力を持っていた。

第2節. 志望大学の選抜方法 研究参加者の「進学校の呪縛」と志望大学の選抜方法は密接に関連していた。竹内（2016）は、大学選抜に模試結果などの客観的指標を重視した選抜と生徒の適性・興味などを重視した選抜の二つがあったとしたが、これは“滑り止め”大学を志望することを想定していない。“滑り止め”大学は受験者の本命大学ではなく、その選抜は第一志望大学よりも主体性の欠けたものになっている可能性がある。第一志望大学を上記2つの選

抜を通して慎重に選んだとしても、滑り止め大学に入学した場合、不本意感を持つことになる。

第3節. 心理教育的援助サービス 第1節で述べたように、進学校出身者は新たな価値観や不合格を受け入れることで、学歴至上主義が崩壊し、視点を未来へ切り替えることで呪縛から解放される。しかし、引き起こされた不本意感が残り続けた場合、第1章で言及したように大学への不適応につながる可能性がある。不本意感を持ちやすい進学校出身者への援助については、三段階の心理教育的援助サービス（石隈, 1999）の概念が役立つと考えられる。心理教育的援助サービスは、一次的援助ですべての生徒・学生、二次的援助で援助ニーズの大きい生徒・学生、三次的援助で特別なニーズを持つ生徒・学生、と援助の対象が移り変わっていく。本研究の中心テーマである「進学校の呪縛」の問題は、進学校の全ての生徒に関連している可能性があり特に周りの雰囲気にも強く影響を受けやすい生徒はさらに苦しむことになるため、一次的援助・二次的援助の有効性が考えられる。これらは、不登校や不適応を予防できるため、三次的援助よりも先に考慮することが重要だと考えられる。

まず、一次的援助では、進学校のほとんどが取り組むことになるため、第2節で述べた志望大学の選抜方法に対する援助が考えられる。進学校の進路指導では、滑り止め大学への入学をあまり想定していないため、入学した時の意味付けが難しい。また、基本は客観的選抜による進路指導に沿うため、生徒が十分に意味付けできていない様子も語りから見受けられた。つまり、進学校の生徒が意味づけできていない滑り止め大学に進学し不本意入学のリスクを高めることを防ぐためには、第一志望大学でなくても受験者の興味関心と学力の両方を考慮した選抜を行える進路指導体制を整えることが必要だと考えられる。

次に、二次的援助では、進学校の呪縛によって苦しんでいる生徒・学生への援助が考えられる。様々な進学校での呪縛の内容が彼らへ焦りや強迫感、自信喪失を促す要因になっているため、実際に援助を考える上では彼らが出身校それぞれの強制する価値

観が絶対ではないことを自覚できるように援けることが重要であろう。具体的な方法としては、例えばキャリア教育を通してさまざまな人生設計を知ってもらうことが考えられる。

第4節. 今後の課題と展望

本研究において、現在「進学校の呪縛」に苦しんでいる進学校出身者の経験プロセスは描き出せていないこと、内部推薦による進学者など進学校出身者以外の例についてのサンプリングが行えていないことなどは今後の課題であり、取り組んでいくべきことである。

最後に、本研究で不本意入学の問題と進学校問題の関連が示唆されたことを踏まえ、今後の展望について述べる。社会的には、秋葉原事件の加害者が携帯電話に「県内トップの進学校に入って、あとはずっとビリ、高校出てから8年、負けっ放しの人生」と書き込んでいたというエピソード（木村, 2014）は記憶に新しい。また、富田（2015）の研究から、教師は生徒の呪縛を醸成させる側だけでなく、進学校の呪縛に縛られる側でもあることを描き出している。つまり、進学校の問題を研究する上で、生徒—教師間だけでなく、教師—指導する管理職—国の制度の関係についても研究する必要があると考えられる。

加えて、主にDさんの語りで出てきた初等～高等教育と並行して存在している塾及び塾でなされる教育の存在も、塾講師の言葉や周りの雰囲気も考慮すれば、進学校の呪縛を増大させる大きな要素だと考えられ、進学校の呪縛との関連についてさらなる検討が必要である。“家族の影響”の変容過程については本研究で焦点にしきれなかったが重要な課題である。高等教育の大衆化が進む一方、現代よりも少子化が顕著ではなく大学に入れる定員も今より少なかった時代は現代の大学生の親がちょうど受験戦争に巻き込まれた時期で、進学校の呪縛に苦しむ大学生の親の中には「元不本意入学者」も一定数いると考えられる。元根（2016）の調査や研究参加者の語りを踏まえると、「元不本意入学者」の親が子どもの進路に過干渉する状況があると考えられる。

内田（2011）の「呪いの時代」では、呪いを解除

する方法は「祝福」しかないとされている。祝福とは、弱い自分を受け止め愛することである。「自分はおもつと上にいけるはずだ」と自尊感情を肥大化させることは祝福ではない。筆者は、学生たちが呪いを祝福し、努力をし続けるためにはより良い教育環境を作りあげ、まずは進学校の呪縛から彼らを解放し、歪んでしまった自己評価を整えるべきだと考える。

文献

- 細木 照敏 (1980). 大学生生活に不適応な学生たち 教育と医学, 28, 1022-1028.
- 石隈 利紀 (1999). 学校心理学——教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス 誠信書房
- 木村 隆夫 (2014). 秋葉原無差別殺傷事件, 加害者 K の育ちと犯罪過程の考察 日本福祉大学子ども発達学論集, 6, 65-85.
- 木下 康仁 (1999). グラウンデッド・セオリー・アプローチ ——質的実証研究の再生 弘文堂
- 木下 康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 弘文堂
- 小山 秀樹 (2001). 大学受験生のストレス反応に関する研究: 受験生に有意差が見られるストレス反応の項目について 日本教育心理学会第 43 回総会発表論文集, 153.
- 松原 達哉 (1993). 学生相談の現状と課題 大学と学生 (特集「学生カウンセリング」), 130, 7-12.
- 松原 達也・宮崎 圭子・三宅 拓郎 (2006). 大学生のメンタルヘルス尺度の作成と不登校傾向を規定する要因 立正大学心理学研究所紀要, 4, 1-12.
- 文部科学省 (2019). 学校基本調査 文部科学省 2019 年 12 月 25 日
<https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm> (2020 年 7 月 10 日)
- 元根 朋美 (2016). 自校教育の取り組み —学生の自校への愛着, 誇り, 居場所づくりに効果があるのか?— 人間環境科学, 23, 5-17.
- 中畝 菜穂子・内田 照久・石塚 智一・前川 眞一 (2003). 進学校における大学受験に関する意識と学内成績及び性別の関係 進路指導研究, 21 (2), 11-22.
- 佐藤 進・鈴木 貴士・川尻 達也・山口 真史 (2016). 入学時に大学に対する不本意感および学業へのつまずき感を有する学生の特徴 工学教育研究, 24, 53-62.
- 内田 樹 (2011). 呪いの時代 新潮社
- 竹内 正興 (2016). 進学校出身の大学不本意入学者に関する研究 ——大学志望度と認定に着目して—— 佛教大学大学院紀要 教育学研究科篇, 44, 19-33.
- 竹内 正興・定金 浩一 (2020). 現代の大学不本意入学者 —入学と就学の観点からの検討— 甲南大学教職教育センター年報・研究報告書, 1-11.
- 寺崎 昌男 (2010). 自校教育の役割と大学の歴史 —アーカイブスの使命にふれながら— 金沢大学資料館紀要, 5, 3-11.
- 富田 知世 (2015). 「進学校」制度の確立過程と教師の主体性 —東北地方 X 高校を事例として— 東京大学大学院教育学研究科紀要, 55, 120-128.
- 鶴田 一郎 (2016). 不本意入学した女子学生の事例 広島国際大学教職教室教育論叢, 8, 33-41.

(2020. 3. 31 受稿) (2022. 7. 7 受理)
(ホームページ掲載 2022 年 8 月)